自分研究と響き合う授業　2005.6.24

校長　安食洋一

我々の仕事は授業が命。我々教師に様々な能力や個性が備わっていても、それを授業の中で活かされなければ仕事の成果にならない。教材研究よりも大事なのは、自分研究である。教材研究が深まったとはいえ，子どもとの響き合いがない授業、子ども同士の響き合いがない授業は、自分研究が進んでいないからではないだろうか。

授業の究極の目的は、教師と子どもの心の響き合い、魂の響き合いだろう。子どもと教師、子ども同士が交流する時間が設定されなければ、知識の切り売りになってテストが終われば忘れ去られるものになってしまう。

子どもに感動させたいのは何なのか，つけたい力は何なのかはっきりさせることが，自分研究であり、教材研究であろう。時に、方法論、小細工がもてはやされている気がする。教師として、授業への真摯な姿勢や覚悟がなければ，子どもの成長と人生に対峙できない。方法論じゃない，教師の自分研究をもっと進めるべきと思う。

３０数年来、かなりの数の授業研究会に参加したが、子ども同士が響き合っている授業にはめったに会えるものでない。熱心な教師と意欲的な子どものピンポン玉のやり取りに終始している授業もみられる。子ども同士による響き合いは本当に必要なのだろうか。あまり多く実現されていないところを見ると、需要があるのだろうかとさえ考えてしまう。また、響き合わせるための手だてや方法についてもまだまだ整理されていない。

そこで、響き合いのある授業の交流活動の条件を考えてみた。

(1) 課題の選択肢を絞り論点を際だたせる。２つ～３つの論点を１つにして話し合う。

(2) 話形の訓練は必要。（みなさんどうですか。いい考えですが。という理由で、わたしは～と思います。）

(3) 学習の流れや、自分の考えを書き込めるプリントやノートにメモしながら、話し合わせる。

(4) 学習集団を個から、２人、小グループ、そして、全体の場へと練り合いの練習をさせ、変化させる。

(5) 発言を最後まで聞き合う習慣をつけ、聞くときにうなずき合う。そして、すぐ質問を出す練習をする。

(6) 教師の介入は、問題がそれたとき、道徳上問題があるときだけに絞る。

以上は、有効と思うがいかがなものだろうか。

私は経営の重点に、授業改善の視点として①学習形態の工夫　②指導組織の工夫　③指導案設計の工夫　④学習環境の工夫　⑤評価の工夫　⑥教育メディア利用の工夫　の６つを上げた。発問の工夫による改善だけでは，授業改善はなかなか進まない。この６つの授業改善の視点で今後も研究していきたい。